



基本CG15枚+α

♡♡♡もつと癒ませて触手様♡♡♡

本編たっぷり100枚収録!

とある回乳と貧乳の 触手苗床化計画



「離しなさい、このっ……！」

あの子さえいれば、こんな触手なんて……！
昌子が内心で嘆いたとき、
地下室に1人の少女が入ってきた。

「お久しぶりでえす、昌子さん♪」

あおつき しょうこ
青月 昌子

ベテランの悪滅師。クールで知的。
性的には過敏なのだが、本人はまだ
気が付いていない。処女。

あしや みちる
声屋 ミチル

駆け出しの悪滅師。
性格は、直上気味で突っ走るタイプ。

正気を失っても許されない

「また完全ではないので孕ませるには至らないが、もう何度も快楽を与えてあげれば充分だろう。小娘はすでに触手を引ひ込み、準備万端のようだった。」



絶望の人体改造!



触手出産祭り!

触手風呂で∞イキ!!!



触手責め地獄でイキ狂い!!!

改造された乳首も有効活用!



「離しなさい、ISOL……」



絡みついてくる触手からどうにか逃れるべく、必死に手足を動かす。

しかし柔軟な身体を持つ異形のモノどもは、私の抵抗を容易くいなしてくる。

そのくせ、まるで筋骨隆々な男のような力強さまであった。

どれだけ抵抗しようとも決して離れないそのしつこさで、胸中で焦りばかりが膨らんでしまう。

「……あの子がいれば、いっせいに……」

「お久しぶりです、昌子さん」

「ミチルっ……ね、あなた、どうして「ミチル」……」

ドアから入ってきたその少女を見て、目を見開く。

芦屋ミチル、私の「仕事」におけるパートナーの少女だ。

なぜ「こんな場所」にいるのか問い詰めたいが、しかし今はそれよりも優先すべきことがあった。

「お願い、ミチルっ……この触手を、どっかにかけて」

「ええ、どうしてですかあ？」

みんな可愛くていい子だし、抵抗なんてしなくていいのよ」

「え……ミ、ミチル……？」

「その子たちに身体を任せるとすっごく幸せになれるんですよ？だから昌子さんもそうしましょっ」

その瞳に、暗示や幻術で操られている様子はない。

「ミチル、お願いだから正気に戻って……」

万感の思いを込めた言葉に、ミチルはへらりと笑うだけだ。

直感的に、もっこの子は正気を保っていないのだと理解させられた。

ああ、どうして「こんな」になってしまったのだろう。

ミチル



嘆きとともに、あの日、ミチルと最後に言葉を交わしたときのことが鮮明に蘇ってくる……。

——私とミチルがとある学園を訪れたのは、数ヶ月前のこと。連続している女子学生失踪事件に、憎き“悪しきもの”の関与が認められたことが理由だった。

私こと青月昌子は、
あおいき
幼い頃より悪しきものを

滅するためだけに育てられた——悪滅師だ。そしてその相棒である芦屋ミチルも、同じく悪滅師。

私たち2人は悪しきものを滅ぼすために、失踪事件の相次いでいる学園に教師と生徒として潜入し、調査を始めた。

いつも通り、日常生活に紛れながら情報を集めて討伐をするだけだったのだが……。

ミチルは慎重に事を運ぶ私の方針が前々から気に食わなかったらしい。あの子は私の言葉を無視して単独行動を始め。

……結果、失踪した。

私はミチルを探しながら、並行して悪しきものの調査を続けていった。今回の悪しきものは、とあるアプリに寄生し、それを介して女子学生たちを魔界へと連れ去っていたことが判明した。

そうして放課後になり。

学生がいなくなったところで、

私は件のアプリをタブレット端末にインストールした。

ただ討伐するだけならば、

私1人でも問題ないという自負があったのだ。

しかし端末から現れたのは、悪しきものではなく触手だった。

一度に溢れだす触手も次第にその数を増やしていき、

何百匹も倒すうちに、ついに隙を突かれてしまい……。

抵抗虚しく、

私は魔界へと引きずり込まれてしまったのだった……。



——随分と活きのいい女だな。
その女を見た俺の第一印象はそれだった。

「ミチル、お願いだから正気に戻って……」

「無駄だぞ。その娘は既に俺の虜よ」

「っ!? 貴様、何者だっ!」

「くくく、俺の名前はギニョル。」

触手の王であるニョルヒム様にも認められた
超一流の触手フリーダーよ」

「つまり貴様が、今回の諸悪の根源というわけか?」

「悪とは酷い言い草だ。まあ否定はせんがな」

「貴様、ミチルに何をした?」

「ふん、質問ばかりだな。いいで、教えてやるうじやないか。
俺は触手を繁殖させる専門の仕事をしている、
いわゆるフリーダーというやつだ。」

触手の繁殖には様々な方法があるが、
苗床にもっとも適しているのは人間の雌でなあ。
だが人間は脆いだらう? 常に不足してしまっただけ」

「まさか、そんな理由で多くの女性を攫っていたのか……」

「そんな理由とは酷いな。俺の手によって育てられた
触手や苗床は質がいいと魔界でも有名なのだぞ?」

お前の仲間であるあの小娘も苗床として出来がよくてなあ。
既に質のいい触手を何度も産んでるぞ?」

「ぞ、そんなっ……なんて?」



「はあい、よいしょと……昌子さん、アタシと一緒に気持ちよくなりましょうねえ」

「し、正気に戻りなさい、ミテル」

「やっほー」

「くくく、さあアツを見せよう」

「な、何をすることもりなのっ」

「なあに、見ていればわかるさ」

「ほおら、アタシこんな素敵なものを貰ったんですよおっ」

「言うやいなや、」

「小娘の陰核がムクムクと肥大化し――」

「ひい……!!」

「ほおら、すごいでしょおん
これ、ギニョル様からもらったんですよおん」

ドクン、ドクン、
と小さな脈動を繰り返すツシは、
人間にとっては異形ともいうべき物体。

俺が手ずから小娘に寄生させた、
触手だった。

「な、何よそれっ……いったい、何なのっ……」

「触手だ。雄のな」

「お、雄の触手っ……？」

「俺が育成している触手は雌雄同体ではないのでな。
雄と雌を交配させる必要がある。
人間とて雄には似たようなものがあるだろっ」

「そ、そんな……それじゃ、あれは……」



「ゴッすく気持ちいいんですよお？
それに、こんな「でもできちゃうし」」

「ははは……？ いや、嫌……」

「ほらほら、逃げちゃダメですよお？
昌子さんの可愛い乳首、
可愛がってあげますからわねえ？」

「うう……」

「や、やめなさい、ミチル……！
お願いだから、やめて……！」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」

「うう……」



「知ってるんですよお、
昌子さんが乳首にコンプレックスを持っていること、
身体を洗うときも、
そこだけはそっと触ってましたよわねえ？」

「でも大丈夫、気持ちよくなれば
恥ずかしい」となんて忘れちゃいますよお？
こゝんな風」

「や、やめなさいと言ってることわかって……
いい加減、正気に戻りなさい……」

「や、やめなさいと言ってることわかって……
いい加減、正気に戻りなさい……」

「や、やめなさいと言ってることわかって……
いい加減、正気に戻りなさい……」

「や、やめなさいと言ってることわかって……
いい加減、正気に戻りなさい……」

「そんな風に強気でいられるのは今だけですわよ？
ほおら、そろそろ……ん」

「はあっ、んっ……
やめてっはっ……んっ……」

「あははっ、ほおらもう
気持ちよくなってきたでしょうっ。
乳首も……んなに膨らんじゃっつるん」

「嫌っ、見ないでえっ……んっ、
くっ……嘘、
どうして……んな……んっ……」

ニまんニまん
ニまんニまん

グッ
グッ
グッ

「どっだ、気持ちいいだろう？ それが触手の良さだ」

「誰が、気持ちよくなんてっ……んっ……
……んなの、おぞましいだけに決まってるじゃなっつ……」

「そんな訳がないだろう。お前は知らないだろうが、
その粘液には催淫効果があるんだぞ？」

「なっ……？ 催淫効果って、何よ、それっ……、
んっ、ふっ……ダメさっ……ひっ……
乳首っ、そんなに擦らないでえっ……」

「ほら昌子さん、これくらいいはどつですかあ？」

「やだっ、ダメっ……」

そんなに強くされど、もうっ……んんっ、
んくっんっ、んんんっんんっ……」

もうっ、やめてえっ……」

こんなっ、乳首なんかでえっ……」

嫌っ、嫌ああああっ……」

どっかが甘酸っぱい
濃厚な香りがふわりと漂ってきた。

絶頂を迎える直前の匂いだ。

「……………」

「あはは！ 昌子さんイッチやりましたねえ！

ほおほ、」の予すっくく気持ちらららっ……」

「イッて、ないっ……」

「こんなので、イッてないんだからあっ……」

どう見ても絶頂を迎えたらんせ、強情なやつだ。
まあ認めようが認めまらな「っすは関係ない。
これからやる」は、
最初から決まっしらのだから。



「おお、続きた」

「ひゅ……な、何をすつつもりなの……まさかっ」

「くく、そのままかだ」

「昌子さん、今度は一緒に気持ちよくなりましょうねえ……？」

正面からは小娘がにじり寄り、頬を緩ませながら熱い吐息をハアハアと漏らしている。

股間に生えた雄触手は、今か今かと快感を欲して小さく脈打っていた。

その様子に、女は自分がこれから何をされるのか察したようだ。

「お、お願いやめて……私、まだ経験がないの……」

「あれえ、そうだったんですかあ……？昌子さんってもう大人だし、経験くらいあると思ってました……」

「ええ、したことないのよ……だから、こんな初めては嫌なの……ミチル、あなたならわかるでしょ……」

「もちろんわかりますよ……安心してくださあ……」の字を使つて、すつと素敵な思い出しあげますねえ……」

「そんなっ……!?
お願いだから、やめてっ……
嫌ああっ……ひぎっ……」

「それが、昌子さんの感触なんですわね……
はあああ……気持ちよくて、腰動いちやうっ……」

「ひぎっ……嫌っ、動かないでっ……
本当に、痛いのおっ……あぐっ、んひぎっ……」

「あはあっ……ん、なに「れえ」……
思ったよりも、ずっと気持ちさらさら……」

「ひぎっ、んぎっ……
動かさないでっ……言ってるの……」

「そんなのムリですよおっ……あはあっ、
ああっ……こんなの知っちゃったら、
止まらないっ……ん」



「おい、遊んでないで役割を果たさんか」
「はあ……昌子さん、いきまますわね……
んっ……は、ああああっ……ん」

「あはあ……」

「くく、随分とお楽しみだったな」

「くっ……ち、近寄るなっ……」の、化物めっ……」

もつと遊んでやりたいと……るのだが……。

しかしせつかくの母体に

最初から無理をさせる訳にもいかない。

少しばかり、休ませておくとしよう。

「ギニョル様あ、アタシまだ物足りないですっ……」

「ふん、少し待て。それも仕事だ」

「ミテル、いい加減に目を覚ましなさい……」

「どれだけ必死に呼びかけたところで無駄だぞ？

俺が操っている訳ではないのだから」

暗示や催眠といった特殊な魔術を用いている訳ではない。

苗床調教を経て、小娘が自らの意思でこうなっただけだ。

「黙れ、貴様の言葉など信じられるか……」

「ふん、本当に生きのいい女だ」

言っても信じられないのなら、見せてやるっじゃないか。

「気が変わった。小娘、可愛がってやるぞ」

可愛い触手たちを操り、

ぼんやりと様子を見守っていた小娘へと伸ばし――。

「ああんっ……ん」

「待ちなさい、
その子に何をするつもりなのっ……」

「なあに、」

どうしても信じられないと言っただけ。俺の仕事を
見せてやるうと思っただけだ。俺の仕事を
じっくり特等席で見せてやるう」

「仕事って……まさか!!」

「くくく、しばらく大人しく見ているんだな」

「きやあつ!? は、離しなさい——んんむっ!?」

邪魔して「ないよう、触手たちを使って身動きを封じ、
ついでに騒がないよう口も塞いでおく。」

せつかくなので、その時、よく見える、位置までズルズルと引きずった。

「待たせたな」

「はあ、はあ……ギニョル様、早くぅ……」

「どうした、そんなに欲しいのか？」

「はい……♪ 昌子さんとのセックスも良かったけど、やっぱりアソコをズボズボ犯して欲しいんです……♪」

「くくく、そうかぞうか」

「お願いしますっ……ん、エッチな涎でいっぱい濡れてる穴に、触手ハメしてえ……ん」

「いいだろっ、いっくぞう……」

「んはあああああああ……ぶっとい触手、きたあああ……ん」

「いやあ、いいぞう……」

「相変わらずいい反応だ。最初の頃が嘘のようだな」

「だって、気持ちいいから……ん」



「アタシは我慢を知らない淫らな苗床女です……
だから、もっとも……」の触手で、グチヨツチ「」なるまで犯して……」
「くく、もはや羞恥など捨て去ってらるな」

「はぁんっ、あはぁっ、
あぁんっ……
やだっ、すっ……」

「ほおら、まだいくぞお！
好きなだけよがり狂え！」

「んほぁあっ……
これっ、しゅきっ、しゅきっ……
感じすぎて頭おかしくな……
んひぁっ、あぁあっ、あはぁあぁっ……
もうイッちゃいそわれすっ……」

「いいぞ、好きなとき「達してしまえー
同時にだっ、ぶっ」と放つてやるっ……」

「はい、イキますっ……
んはぁっ、あぁっ、あぁあぁっ……
せしゅん、せしゅん……」



正直こんなにあっさりと達させてやるのは好みではないが、
今回の目的は犯すことだけじゃない。
強情な女に見せつけてやるのは、犯した「その先」だ。

楽しむのはまた今度にして、今はただ小娘の身体に快樂を与えていき――。

「ああんっ、ああんっ、
きやああんっ……!!
イツちやうっ、イクっ、
イクっ、イクっ……!!
んっはああああああああ
ああああああああああ
精液っ、すごい量きてるうっ……!!
熱いのが奥にビュービュー出っ、
子宮でイクっ、またイクっ……!!」



「んはああっ……♪
はあ……はあ……精液、いっぱい……♪」

長く出しただけあって、随分な量になったようだ。

小娘の乱れっぷりに
目を見開いて固まっている女に
視線をやりニヤリと見下ろした。

「くくく、さあて見ものだぞ。

ここからお楽しみだ。

この小娘の子宮には、雌の触手が寄生させてあってな。
雄の触手の精液を浴びれば……こうだ」

手のひらに魔力を込める。

ブリーダーだけが扱うことのできる、触手の育成を促進する魔術を発動し――。

未だに恍惚としている小娘の腹部に向けて、放った。



「我慢するー。さあ、お次は——」うたー」

「んひあああああ……」

「手触」

「カカカ」

「んひあああ」

「んひあああ」

先程とはまた異なる触手を伸ばし、そそり立ったままの寄生させた雄触手に絡みつける。

一見して他の触手と同じに見えるコシは、俺が独自に品種改良したものだ。

この触手は寄生した雄触手との相性を高め、催淫粘液の効果を何倍にも強く、そして即効性を上げられる。

「んひあああ、んひあああ……」

頭バカになる、んひあああ、んひあああ……

んひあああ…… あっ！ あっ！ あっ！ あっ！

んひあああ…… ひあああ、ひあああ……」

「カカカ」



「さあよく見ているよ！ 触手を孕み、
しっかり育った状態で雄の触手を刺激してやると
——こうなる——」

セッ

セッ

セッ

「きりりっ、もろもろっ、ちゅっ……」

んほあああッ……

出りゅっ、出りゅっ、ちゅっ……

んっはああああああああああああ

ああああああああああああああ

ああああああああああああああ

「おおおー！ いいぞお、
可愛い子たちじゃないか！」

「ひやはあああああッ…… 出りゅっ……」

赤ちやん触手、フツフツ出りゅっ……

んひあああああッ…… んはあああああッ……

んひあああああッ…… んはあああああッ……

イキ狂っている間も、膣口から溢れ続ける
大量の可愛い子供たちを産んでいる姿を眺めながら……。
俺は、いい苗床に育ったものだと満足感を覚えるのだった。

セッ

出産を終えたところで、小娘を床に捨てる。

「面白かったらうつ。お前でもアしをさっしつてもらえんか」

「ひっ……」「はなす……」「い、嫌っ……」

「まずは馴染むのに時間のかかる雄触手の寄生からだ。いつもは股間に寄生させるの」あなたが……お前はいらせんを持つてゐるからなあ」

「ひっ……は、離して……」
「そんなもの、近づけないで……」
「そう怯える」とは、小娘の様子を見たらうつ。そう悪いものでやないぞ」



「さあいくぞ？ 安心しろ、痛みはない」

「ひあぁっ……！！ 嫌っ、嫌あぁっ……！！」

乳頭に「ススリ」と針を刺すと、女の抵抗が激しくなる。

「やだ、何か入ってきてるっ……！！
嫌、嫌あぁっ……！！ 変なものを流し込まないでっ……！！」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

悲鳴じみた懇願など無視して、針触手の脈動を続ける。

流し込んでいるのは、もちろん雄触手の「種」となる液体だ。

幼虫が蛹となった際に一度「ドロドロ」に溶けているのと同じように、触手の種は「の」のように液体として注ぎ込まれる。

そうして充分に乳頭内部を満たしたと「なるで、ゆっくりと針を抜いた。

「ううう……はあ、はあ……い、嫌あ……何、「これ……」

「ほ、調子はいいだろ」

「ドクドクって、脈打ってる……ひら……乳首の中に、何かいるっ……」

「くく、しっかりと根付いたようだな」



女の言葉通り、その乳首は内側で何か蠢いているかのようにヒクヒクと震えている。植物や菌が根を張るように、少しずつ女の乳頭を我が物へと作り変えているのだ。

「そあ、もうすぐだ。面白い」となるぞこ」



「んはぁあ……」

「思った、普段より敏感になっで
気持ちいいだろっ」

「何、これえっ……!?」

「乳首、変になってるっ、
ふぁっ、あぁあっ……!!」

「ダメえっ………頭の奥がチカチカしてっ、
んはぁあっ……」

「まだまだ「ん」なものではないぞっ？
馴染めば馴染む程に
感度は上がっていくことになる」

「そんなっ、これ以上なんてっ……
ふぁっ、あぁあっ……! そんなの、
身体がおかしくなっっちゃうっ……」

「……その快楽を受け入れてしまえば
楽になるぞ。あの小娘のよう」なあっ」

「い、嫌あっ………それだけは、
絶対に嫌あっ……」

「あっ、あぁっ、んはぁあっ……」



「おお、いつまで嫌がっていられるかなあ！」

「んひあああつ……おかしらんの、乳首から何か出ちゃうのぉっ！」

「いぞぞ、怖がらずにそのまま出してしまえー！」

「んはあああつ?! もうダメえつー！
出るっ、出るっ、出っちゃうわっわっわっ！」

「いぞぞ、見事な射精だー！」

「ひあああああつ……らめえつ、
今ニルニルって擦らないでえつ……！」

「どうだ、良かっただらう？
それが雄の触手に寄生されることの魅力だ」

「くっ……私の身体を、元に戻しなさい……」

「ふん。まだそのような態度を取れるとは、随分と生きのいい女だな」

雄触手を寄生させてやれば二度で堕ちる女のほうが多いというのに、
よほど精神的にタフのようだ。

あの小娘といい、特殊な訓練を積んでいるのかもしれないな。
だが、それならそれで楽しみ方はいくらでもある。

どうせ小娘もまだ意識を失ったままだし、その間に……。

「ひあああ……!!
い、痛い……離して……!」

グッ
グッ
グッ

ズ
ズ

ズ
ズ

グッ
グッ

「くっく……。思う存分に暴れるがよい。
触手を宿して大きくなった乳首に騎をしてやれば、
生意気な口はきけなくなるだらう」

「ふん、うんをわれたら……」

「化物の思い通りにはならなからう……」

「ほう。なかなかの強情ぶりだな」

そらやって抵抗されると、俺の加虐欲求はなおのこ高まる。研究室内で揺れている触手たちに命じた。

「女の乳首を打ってやれ」



「ひらっ……あひっ……んあめめあめっ……
や、やめてえっ……あっ……
乳首が……乳首が痛くて……
おかしくなっちゃっ……」

打擲の一打ごとに、強烈な催淫作用のある粘液が女の乳首へとすり込まれてゆく。

「あっ……あああ……あんっ……
乳首、おかしらっ……おかしらのおっ……」

女自身も、はっきりと快楽を認識してらるに違いない。

「うすれば、さらに気持ちよくなるんぞ……」

「んはあっ……あああ……あひいらっ……
乳首が……もっと大きくなって……ひいらっ……」

「くくく……自分でもわかってるだろう。
勃起した乳首から快楽が走っていることを」

「乳首が……痛いの……
痛いのだ、ヤリっ！んをいっ……
あああ、あああ……」

「いっか。乳首を鞭打たれては持ちのらるか」

「あああ……あああ……わらわらわら……
ため、ためええ……んちゅんちゅん……」





「はあ……、はあ……」

「落ち着いたか？」

「きゃあ……い、嫌……離して……」

「大人しくしろ、さっきのように気持ちよくなりたいだろう？」

「ひん……な、何をしたの……」

「わかるだろっ？ 催淫粘液だ、大人しくしてる」

「嫌っ、やめてっ……あ……ひん……」

触手を蠢かせながら、
粘液をネチネチと擦りあげる。

指の隙間からヌルリと入り込み、
執拗に秘所を塗っていった。

「よおし、こんなものでいいだろう」



「ひっ……な、何よ「れっ」……」

「そう怯えるな、「これはお前ら人間どもの玩具だろう?」

女に着けたのは、
人間界で手に入れた貞操帯と呼ばれる玩具だ。

「な、何のつもりなのよ……」

「こんなもの、着けさせるなんて……」

「なあに、すぐにわかるさ」



あれだけたっぷりと催淫粘液を塗り込んだのだから、
すぐに効果は出てくる筈だ……。

「はあ、はあ……身体が熱い……どうして、「んを」……」

「どうだ、もどかしいだろう？ 触りたくても触れないのだからな」

「だ、誰が「」の程度の「」でえ……はあ、はあ……」

強がってはいるが、
切なそうな表情は隠せていない。

乳頭に寄生した雄触手もすっかり勃起状態だ。

「随分と苦しそうじゃないか。どうだ、助けてやろうか？」

「はあ、はあ……」「これ以上、何をしてもりなの……？」

「なあに、何かするのは俺じゃない。お前自身だ。

先程の行為を思い出せ。その行為を自分でしてみればいいんだ。楽になれるぞ」

「はあ、はあ……楽になれる……」



「せあ、やってみなさい」

「ふああっ……んっ、はああっ……な」「これ、さっきより乳首がツクツクきてるっ……ふあっ、ああっ……」

「びっ、自分で触るのも悪くないだろうっ……」

「や、やだっ……
そんなに見ないでっ……あっ、ああっ……」

視線を恥ずかしがる女だが、
その手と指の動きは止まらない。

「んっ、はあっ……」

ダメ、これじゃ身体の疼きが取れないっ……」

はあ、ああっ……どっしたら、いいのおっ……」

「だったらもっと力を込めてみたらどうだ？」

大丈夫、乳首は多少強くしても気持ちいいぞ」

「もっと、強く……？ 本当に、それでもっと気持ちよくなれるの……っ」

「……、本当だとも。なんなら試してみようっ」





「ほっ……あっ、あっ……」

なに、これさ……「ん」の初めてさ、あっ、あっ……」

乳首、こんなに気持ちいいなんてさ……」

あっ、あっ……「ん」より、す……」……」

「さっ、寄生されるのも悪くないだろうっ……」

「それは嫌だけどおっ、あっ、あっ……」

でも、気持ちいいものは、

気持ちいいのおっ……あっ……」

「ほら、もっと違う触り方をしてみる。
さうだな、根本から抜くように刺激してみたらどうだ？」

「ほっ、ああああんっ……」

嘘っ、「うちのほうが気持ちいい……」

あっ、あっ、ああああんっ……」

やだっ、乳首っ、ビクビクしてるっ……」

さっきみたいだ、また出ちゃうっ……」

「~~~~ 555~… ン6666666666666666~」

「はぁあつ、あぁあんっ！
自分で触ってるのに、出るっ、出ちゃうっ……！
ふぁっ、あぁあつ、んはぁあぁあつっ！」

自らの手で勃起した乳頭を扱きながら、
まるで乳搾りのように精液を噴出してた。

「んふぁああつ………
コレ、しゅじゅっ……ふぁっ、あぁあつ………!!
自分で射精するの、しゅじゅっ………」

同時に絶頂も迎えているようで、貞操帯の隙間からは淫らな蜜が噴出している。

いいイキっぷりだ。気に入ったぞ。



「くく、どうだ？ 悪くなかったらう？」

「はあ、はあ……くっ……元々、戻せ……」

あれだけの痴態を演じておきながら、気丈にも睨みつけてくる。

さて、その態度はいつまで持つかな？

「う……あ、あれ……アタシ……？」

「ふん、ようやく目を覚ましたか」

「ギニョルさまあ……もつとお……」

「もっと、アタシに産ませて……？」

「まあ待て、まずは女へ寄生させた雄触手の安定化が先だ。

「お前も、女の雄触手で孕んでみたいだらう？」

「昌子さんの触手で、孕む……？」

「うわあ、それってすくステキですら……」

「だるう？ だがその前にしっかり準備をしなければな」

「……、今度は何をやるつもりなの……？」

「なあに大したことじゃない。まずは雄触手の寄生を安定させねば、その精液では雌触手を孕ませられんのだよ」

「そして雄触手の安定化を早める一番の行為は——こうだ！」

「きゃあっ……!? 嫌っ、離してっ……」

「大人しくしろ。おい、やれ」

「はあい……♪ 昌子さん、
また一緒に気持ちよくなりましょうねえ……?」

「ひっ……! いったい、何をす……つもりなのっ……?」

「雄触手の寄生を活性化させ、
安定させるのに必要なのは同じく雄の分泌液……つまり精液だ。
」「今まで言えば、想像はつくだろうっ?」

「お、おまがっ……! い、嫌あっ……やめて、「なにっ……嫌あっ……」



「はあっ……あっ、んんっ……あっ……あっ」

「くくく、どうした？ 気持ち悪いと言つわりには、いやらしい声が漏れているじゃないか」

「んはあっ……あっ、あっ……
う、嘘……どうして、こんなこと……あっ、あっ」

女の声に、戸惑いと甘さが色濃く含まれます。
雄触手から分泌される粘液により、
快感を覚えずにはいられなくなってきたようだ。

「くくく、随分と良くなってきたようだな。
そろそろ、もう一つの乳首も疼いてきたんじゃないか？」

「誰がっ……んはあっ……う、疼いてなんてえっ」

「本当にそうかな。」

「俺の目は犯して欲しがってるようにしか見えんぞおっ」



「くくく、うちの乳首は俺が犯してやるっ！」

「だ、ダメえっ……！ 今、そっちの乳首もさらたらっ……！
んはあああああああああ……！」

「くはは、いい反応じゃないか！
そあら、たぶん可愛がつちやんぞっ！」

「んはあっ、ひあっ、んはあっ……
もっもっ……
「んはあっ、んはあっ……」
くん、ん、ん……」

「んんん、好きなとれっ達っしっまっ！」





「んはあああつ！もうっ、もうらめえら！
オッパイにスボスボされていくっっっ！
いっぢゃんっっっっっっっ！」

「キノールさまあつ、アタンもっ、
出ちやいますっっっ！」

「こっちも出さぞ！
さあ栄養満点の精液だ！
しっかり受け取るがいい！」



「んはあっ……
はあ、はあ……うう……こんなにいっぱい出すなんて……」

「どっだ」「ううううのも悪くなかったらうう？」

「はあ、はあ……もう、離して……
これだけ出したんだから、充分でしょう……？」

「何を言っているんだ？ 面白いのはこれからだろっ？」

「ひっ……い、嫌……なに、「これ……
なんだか、乳首が脈打ってるっ……？」

「さあ、坊やたち！
その可愛い姿をもっと見せておくれ！」





『よおし、成長した記念だ！ 楽しませてやれ！』

よほど楽しみだったのか、
小娘は俺が指示を出すまでもなく
いそいそと女に跨った。

「あはあああ……昌子さんの、太おいっ……」

「んはあっ、ああああ……」

「んはあっ……これ、す……
腰、勝手に動いちゃっ……
あはああ……」

「あああ……ダメっ、
動かないでっ……ひあっ、ああっ、
そんな「擦らないでっ、あああ……」

「あはあっ、あ……
昌子さん、っ……か……
触手……は……鍛えられたマタ……
あ……気持ち……っ……



「ひあああああ……」
「あ……あ……あ……」
「あ……あ……あ……」

「あ……」
「あ……」
「あ……」

「あ……」
「あ……」
「あ……」

「きやあんっ、あっ、あっ、あああんっ……」
「ああっ、もうダメさっ……」
「また、きちゃっ……」
「頭が、真っ白になっちゃっ……」

「ア……」
「ア……」
「ア……」



「きゃんっ、ああんっ……
ああっ、もうダメえっ……
もう、出ちゃっっっ……出ちゃっっっ……」

「きっっ、熱い精液
びゅくびゅくっ出て出してええっ……
あっ、あっ、ああんっ……
アタシも、もうイクッ、イクッ……」

女と小娘が、同時に絶頂を迎える。

「んほあああ……
しゅん、しゅんのおおお……
子宮がくぐぐぐ……
こんなに出たかとハカシなっっっ……」

「あひああああ…… 「花びら」……
止まるなっっ、止まるならのおおお……
んほっ、ほああっ、んほああああ……」

「ふん、今度はこいつが気を失ったのか」

「「めんなさい、少しやりすぎちゃいました」

「まあ仕方があるまい。さて——」

行為が終わるやいなや気絶した女に向けて、魔術を使う。この魔術もまた「ブリーダー」のみが使える特殊なもので、触手の成長具合を確かめられるのだ。

「ふむ、まあ予想通りと言ったところだな」

いい具合に仕上がってきているが、まだ孕ませるには足りないようだった。

しかし寄生自体はほぼ安定しており、何かの拍子で剥離させられるようなことはもうあるまい。

……そろそろ、雌触手を寄生させてもいい頃合いかもしれんな。

しかし雌触手は少しばかり特殊で、

良い苗床にするためにはより魔力の満ちた空間で行う必要がある。いや正確にはどこでも可能なのだが、質が落ちてしまうのだ。俺は「二級品などには興味がない。

やるならば、最高の場所へ移動する必要がある。

「おい、移動するぞ。その女を抱える」

「移動って、もしかして……あそこですか？」

「ああ、懐かしいだろう？」

小娘が、瞳をキラキラと輝かせながら頷く。

「こいつもあの場所で徹底的に快樂漬けにしてやったのだが、だから」そ今となってはいい思い出なのだろう。

「さて、転移するぞ」



「わあ、なんだか懐かしい……!」

「ふむ、何度来ても素晴らしい場所だ」

転移の魔術で跳んできたのは、人間界。多くの触手が蠢き、濃密な魔力が充満している、魔界よりも魔界と化した特別な家だった。

……以前、触手の王であるニールヒム様が戯れに人間界に手を出したことがある。

「こは、そのときの場所だ。俺はニールヒム様に高品質な触手や苗床を上納する役目のために、この場所も下賜された。」

「う……」「こは……」「……ひびく……」

「ふん、ようやくお目覚めのようなな」

「な、何なの……?」「こは、何なの……?」

「そろそろ雌触手を植え付けてやろうと思ってるなあ、そのための場所だ。どうだ嬉しいだろう?」

「い、嫌……近づかないで……!」

「くくく、最初の頃の威勢の良さはどこへいったんだ?」

「ギニールさまあ……昌子さんばかりずるいですっ」

「しばし待て。この女の後で、心ゆくまで可愛がってやる」

小娘は不満そうだが、適当にあしらっておく。そうして触手で手早く女を拘束し、女の肉体を担ぎ上げた。

「あああ……な、何をするつもりっ?」

「やめて、放して……! 放して……!」

「おまえを触手の苗床にしてやる。光栄に思え」

「ひいっ……!? 何……? 何なの、これはっ……!」

「触手の幼生だ。俺が丹精込めて育てた子らだ。可愛いだろう? これを使ってお前に快樂を教えてやるっ」

「ひっひっ、いやああああー!」

「くく、怖がる」はな。すぐに癖になるだろっ」

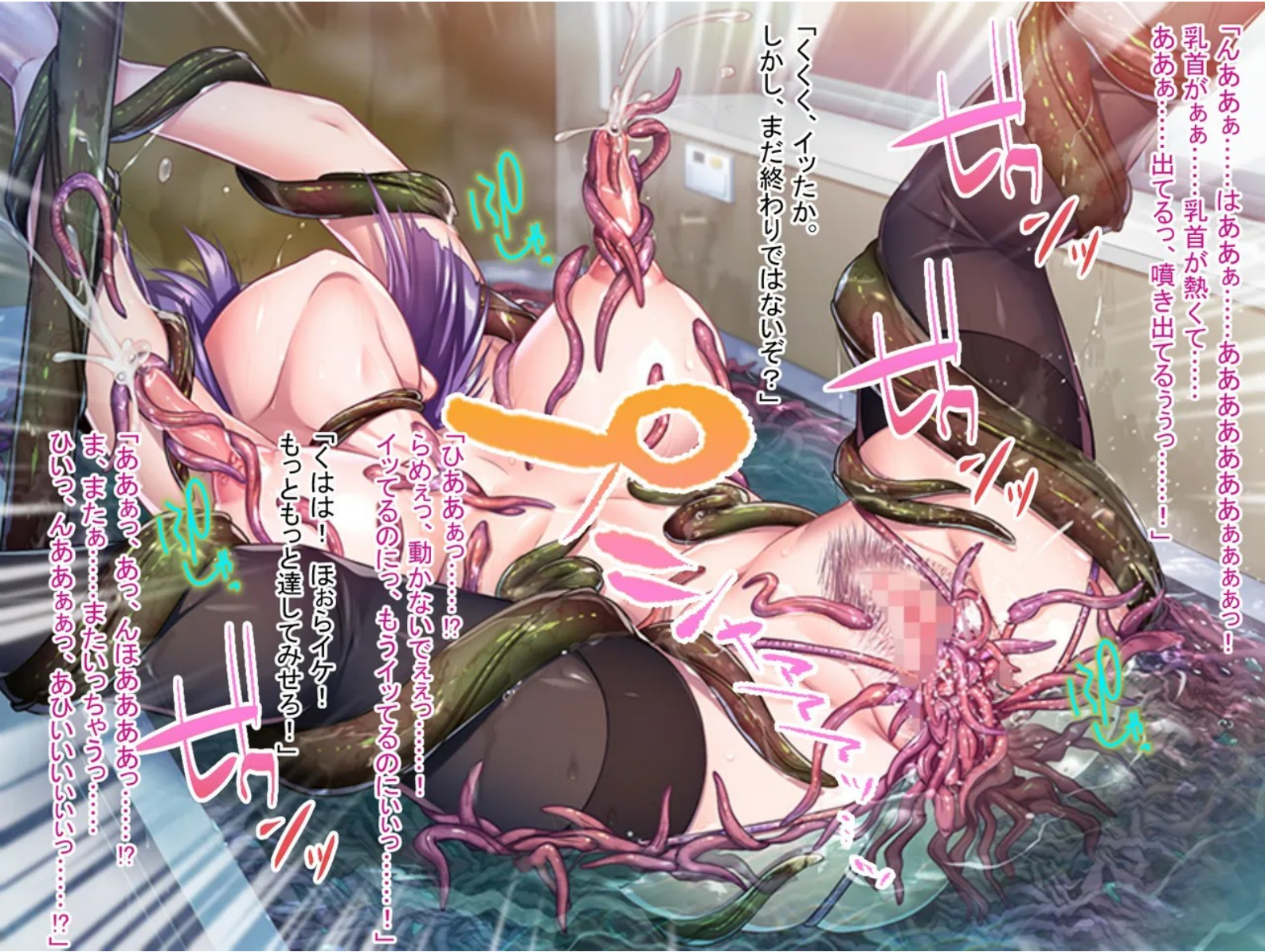
「いやあああああっ……いやっ、いやあああっ」

「たまらぬな。見事な裸踊りだ」

「お、お願いします……! やめてくださらっ、お願いします……!」

「あの小娘も、おまえと同じように哀願していたぞ。しかし、今ではすっかり触手の虜だ」





「んあああ……はあああ……あああああああああつー！
乳首がああ……乳首が熱くて……
あああ……出てるっ、噴き出てるんっ……！」

「くくく、イッたか。
しかし、まだ終わりではないぞ？」

おっ

「ひあああ……」

「らめえっ、動かならねえっ……」

「……いッてるのよ、ぶっも……」

「くはは……」

「……もう……」

おっ

「あああっ、あつ、んほああああつ……」

「ま、またあ……またいらちやつ……」

「ひっつ、んああああつ、あひっ……」

「やっ、と……」

小娘の相手をしてやるか。

「あああ……ギニョル様……」

「お前の貧相な乳房で俺のものに奉仕しろ」

「んっ……はああ……ああんっ……」

ギニョル様の、大きい……あっ……あんっ……」

「どうだ、俺のモノは。久しぶりだろうか？」

「あああ……んっ……はい……ギニョル様のモノに

「奉仕させていた দিয়ে……嬉しいですよ……」

ああああ……はああ……ああんっ……」

ギニョル様に「奉仕していると……あんっ……」

「奉仕をしている身でありながら快楽をむさぼるとは。

呆れた淫乱ぶりだ」

「はいっ、いぎますっ、
オッパイをオナホにされながら、
いぎまじゅるるる……
んっほおおおおおおおお
ああああああああああ
あああああああああ」

「~~~~~」



——そして、射精も落ち着いた後。

俺は浴室へ行き、そこでまだまだイキ狂っている女を回収するのだった。

「さて、お待ちかねの雌触手の寄生といっつか？」

「い、嫌っ……もう、これ以上はやめてっ……」

「くくく、諦めろ」

「あの、ギニョル様。」

その前に、アタシの乳首も今よりもっと気持ちよくしてほしです」

「ん？ どういうことだ？」

「だって昌子さんの乳首、羨ましいから……ダメですか？」

「ミチル……!？」

あなた、どうしてそ」まで……」

「昌子さんは黙ってて。」

ギニョル様、お願いします」

「……ふん、仕方がない」

面倒だが、これもまた苗床の品質を維持に必要なだ。

生物である以上、精神状態によって浮き沈みはどうしても発生してしまうもの。

不満ばかりが溜まると、苗床としては劣化していくのだ。

なんでも願いを聞き入れてやる必要はないが……。

この程度ならば許してやってもよからう。

……だが、女と全く同じというのも面白みに欠ける。

せつかくならば、また違う改造を施してやる」といしよう。

「よう、やるわ」

「それじゃ、よろしくお願いしまあす♪
ああん……ギョル様、くすぐりたいですよ……ん」

「ふん、我慢しろ。」

「痛みを苦しまなくて済むよう麻酔代わりに
催淫粘液を染み込ませてやってるんだ」

「痛い」としちゃうんですかあ？」

「そのために粘液を塗っているんだらう？」

「はあい……んっ、あはあっ……」

「キキキしてきちゃいましたあ……はあ、はあ……」



「あはあああああ……な
な」「れ、す」「おいっ……」

乳首に穴ができたやってるっ……」

「よし、中も作り変えていくぞ？」

「ひああんっ……嘘っ、

オッパイの中、弄られちゃってるっ……

あっ、あああ……気持ち、いいよあっ

ふあっ、ああんっ……」

触手に栄養満点なミルクが与えられるように、
専用の乳腺でも作ってやることとした。

「んっ、ふああっ……はあっ、あっ……ギニョル様あ、
もっとおっ……あっ、あああっ……」

「……………ふむ、こんなものかな」

「……………ふむ、こんなものかな」



「はあ、はあ……うわあ、乳首大きくなっちゃったあ……」

「どうだ？ 自分でも変わったことがわかるか？」

「はい……オッパイがすくくむずむずして……
それと、なんだが張ってます……」

「ふむ、痛みなどはないだろうか？」

「はい……はあ、はあ……ギニョル様あ、
アタシのオッパイ、どうなっちゃったんですかあ……？
教えてくださあい……」

二子

「いいだろう、どうなったのか教えてやる……」





「んはあああつ……!!
な」
「れつ、オッパイの中であつらばら動らなつて、
んひつ、あああああつ……」
「あつらつら……」
「あつらつら……」

「くく、どうだ？ 可愛い子供たちに餌を与えている気分は」

「気持ちいいつ、れしゅんつ……」

「ひあつ、ああつ、んはあああつ……」

「そうかそうか、子供たちも喜んでいる」とだろつ」

「うめつ、少し止まつてええつ……」

「んはああつ、ひいつ、んひあああつ……」

「さつきより気持ちいいの、近づいてきてりゅんんん……」

「いいぞお、イッてしまえ！ さあ子供たち、もっと激しくしてやりなつら……」

「……」

「ミ、ミチル……？ あなた、大丈夫なの……？」

「えへへ……もつとお……もつと気持ちよくなりました……」

「きやあつ?! ミチルっ、あなた急に何をっ……」

「ちようどいい、このまま仕上げに入るか」

「はあ、はあ……気持ちいいっ、なせいで……」

「ひっ……り 嫌っ、やめてっ……」

「お願いだから……正気に戻ってっ……」

「お前の雄触手で女を犯してやれ。そうすれば、お前の逸物にくっついてる雌触手が女の子宮に寄生する」

「はあい、頑張りますっ……」

「ぞ、そんなら……り やめてっ、そんなモノを寄生させようっ……」



「ふん、そんなモノだと？ 生意気なやつめ」

「はあ、はあ……もう、我慢できないよお……早く、やらせて……」

「ああ、待たせたな。やっていいぞ」

んんん

おほん

んんん

IP、IP、IP、IP

「んはああああああああん……」

「あはあ……もっ、もっ、もっ……おっ……もっ、もっ、もっ……気持ちよ……」

「んはあああ……」

「そんなっ、いきなり激しいっ……ああんっ、

ああっ、ひああっ、あああんっ……」

「嫌あっ、太いのっ、擦れるっ……」

「ひあっ、あっ、あああんっ……」

「ああっ、気持ちいいよおっ……」

「これ好きいっ、セックス大好きいっ……あっ、あっ、あああんっ……」

「あひいいいっ……奥っ、ダメえっ……」

「そんな」扱られるとっ、きちやうっ、きちやうっ……」

IP、IP、IP、IP

「喜べ、女。お前の子宮に雌触手が寄生したぞ」

「あああ……そんな……
あんなものが、私の中に残ってるなんて……」

「案ずるより産むが易し、だ。
小娘がそうなったように、お前も触手出産の虜となるぞ」

「ギョルさまあ……
私、まだ足りないんです……
もっと、させてえ……」

「よからう。犯してやるがよい」



「あああつ、はあああつ、ああんつ……!!
そんな、少しくらい休ませてえ……!!
あひいいい、はああんつ……!!」

「はああつ、さっきより気持ちいいかもおつ……!!
あつ、あつ、ああああんつ……!!」

飢えた牝獣のように鼻を鳴らしながら、
小娘は荒々しく腰をつかっていた。

悪滅師を称していた過去は、
もはやすっかり頭になかった。

「くくく、好きなだけするがいい」

子宮に寄生したばかりの雌触手を馴染ませるため、
膣性交で快楽を与えてやらなければならない。
むしろ、何もせずに済むのであれば楽ができるというものだ。

さてそれでは、俺は暇潰しがてら次の苗床となる女でも
引っ掛けにいくとするか……。



……そうして、しばらく経った後。

俺は普段のようにアプリを介して人間の雌を攫い、ある程度の仕事をして戻ってきた。そして、その間ずっと放っておいた女と小娘は……。



「んはあっ、あっ、ああっ……
もう突かないでえっ……んはあっ、ひああっ……」

「あはあっ、あっ、ああんっ……
昌子さんの中、気持ちいいよあ、
ああんっ、ああんっ……」

「なんだ、まだやっていたのか」

数時間は経ったというのに、小娘は夢中で腰を振っていた。
普通はとっくに気を失っていきそうなものだが、流石は悪滅師。
基礎体力が違うというわけか。
では、そろそろ最後の仕上げというか。

「おい、いつまで楽しんでるつもりだ！「うちへ来い」」



「はあ……はあ……今度は、なに……？」

「はあ、はあ……ギニョル様あ……
気持ちよくしてくれるんですかあ……？」

「くくく、いい塩梅になってきたじゃないか」

「いやらしい様相に、見ているだけで
股間のモノに血が集まってくるのがわかる。

「みるみるうちに勃起が始まり、猛々しくそそり立った。
これなら、最後の仕上げ——
俺の精液を注いでやることに、何の問題もなさそうだ。」

「やあ、どんなものか試させてもさあ……」

「んはあああああ……!?」

「おお、これはこれは……
いい具合じゃないかっ。
合格だ、次は感度だな！」

「ひあああんっ、そんないきなり激しいっ……
きやあんっ、あんっ、ああっ、ひあああんっ……!」

「くくく、感度もよくなったなあ!
あれだけ犯されておきながら、
締め付けも濡れっぶりも一級品だ！」

「あっ、あっ、ああんっ……!
そっ、だめえっ……!
そんなにされるっ、またあっ!
またきちゃうっ! きちゃうのおおっ!
あんっ、あああんっ!」

ハ
キ
キ

キ
キ
キ

ん
ん
ん

ハ
キ
キ



「いいぞ、好きなときにイッてしまえ！
こっちもたっぷりと濃厚な精液を注いでやろう！」

「あんっ、あんっ、きやあんっ、ひあああんっ！
もうだめっ！イクッ、イクッ、
イクッ………！」

「くくく、いいイキっぶりだ！
苗床として合格だぞお！」

「あっ、あああっ………
凄い量っ、出てる………
濃厚で熱いのが、ヒュッヒュッ………
あっ、あああああ………！」

「ギニョル様っ、
アタシもっ……アタシもくださあ………！」

セッ
セッ
セッ
セッ

イクッ
イクッ
イクッ
イクッ

ドッ
ドッ
ドッ
ドッ

「いいだろう、いくぞー！」

「あはあああつ……！！」

「これっ、すっ、いっ、あんっ、ああんっ……」

「太くて硬いの、ズズズンきてるっ……」

「くっ、いい締めまりだ！ 押し潰されそうだけど……」

「だって、ギニョル様が

気持ちよすぎるからあつ……」

「ひあんっ、あああんっ……」

「アタシのキツ穴、喜んじゃうんですっ……」

「ひああつ、あああんっ……」

「よおっ、いっぞぞ……」

「あんっ、あんっ、あああんっ……」

「アタシっ、もうきてるっ、きてますっ……」

「太くて立派なおハニスで、

「イツちやいそりですっ……」

「イク、イクますっ……イクッ、イクッ……」





「はあ、はあ……」

ギニョル様あ……身体が、熱いですう……」

「どうしてこんなに……」

はあ、はあ……子宮が、疼くの……？」

「くくく、驚いたか？」

それが俺の精液の効果だ」

「せ、精液の、効果……？」

「俺の精液は特殊でな、孕ませることができん。だが雌の触手を活性化させる力があるのだ」

「そ、そんなっ……それじゃあ、まさかっ……」

「ギニョル様あ……早くっ……早く、孕ませて……産ませてええ……」

「いいだろう！ 仕事の時間だ！」

そっ

そっ

はまっ……♡

はまっ……♡

しっ……♡

んん

んん



「んはああっ、あっ、ああっ……
もう、だめえっ……また、きちやううう……！」

「アタシも、もうイキそうですっ……
あっ、あんっ、んあああ……！」

「おっと、まだイクなよ？
品質を高めるにはこんなものじゃ
足りんのだからなっ」

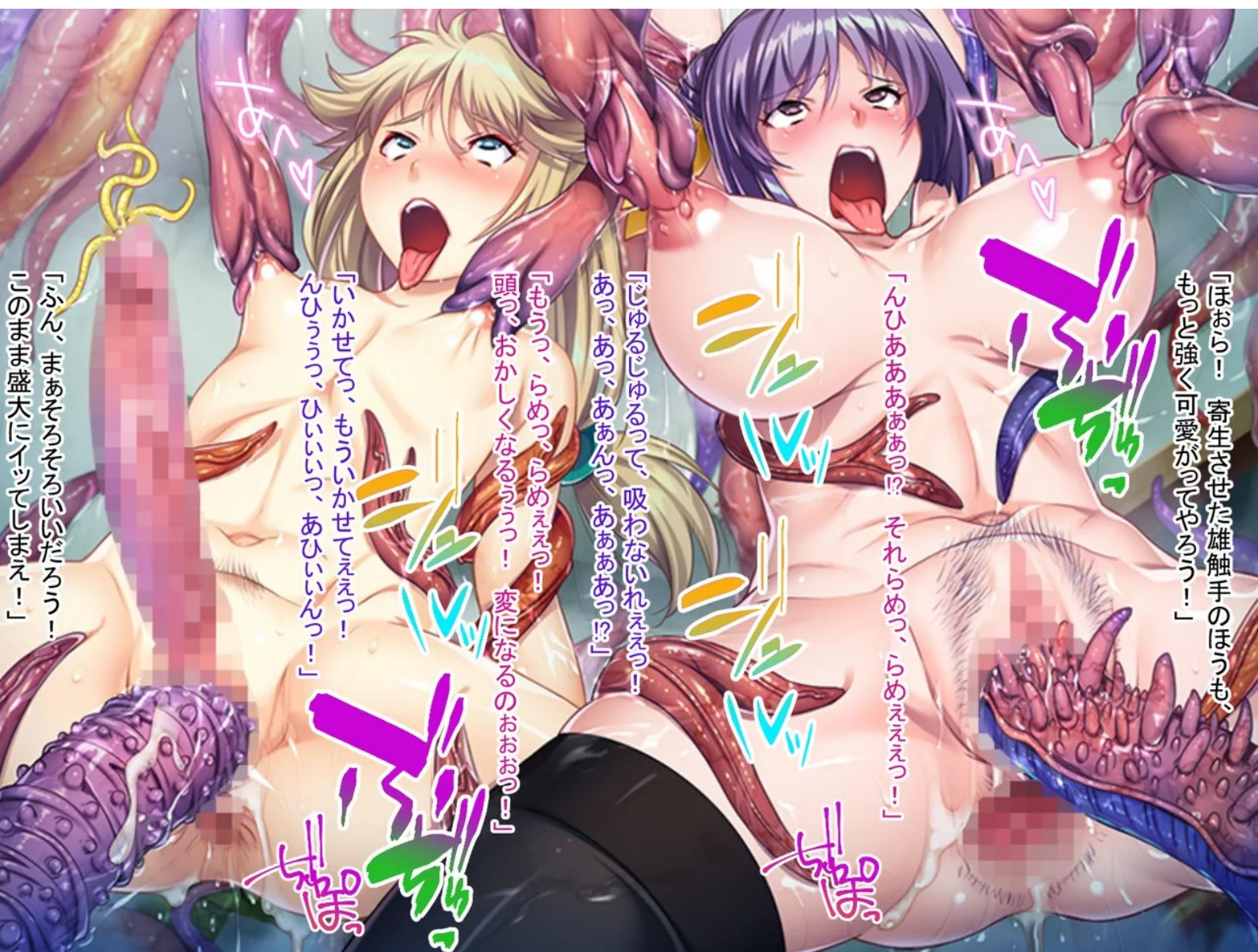
「あんっ、ああんっ……
だったら動かさないで、よおっ……
あああんっ……！」

「ギョル様、イカせてくださらっ……
ふあっ、ああんっ……
お願いだから、イカせてえっ……！」

「いいや、まだまだ！ 限界まで我慢しろ、
でないと酷い目に遭うかもしれんぞお！」

「ぞ、そんなあっ……あっ、あっ、
あっ……ああんっ……！」

「もっと激しくいくぞ……
絶対にイクんじやないぞ……！」



「ほおっ！ 寄生させた雄触手のほっも、
もっと強く可愛がってやるっ！」

「んひああああっ!! それらめっ、らめええっ!!」

「ゆるゆるって、吸わないれえっ!!
あっ、あっ、ああんっ、ああああっ!!」

「もうっ、らめっ、らめええっ!!
頭っ、おかしくなるっ!! 変になるのおおっ!!」

「いかせてっ、もういかせてええっ!!
んひっっ、ひいっ、あひいんっ!!」

「ふん、まあそろそろいいだろう!!
このまま盛大にイッてしまえ!!」

「んほあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ!!」

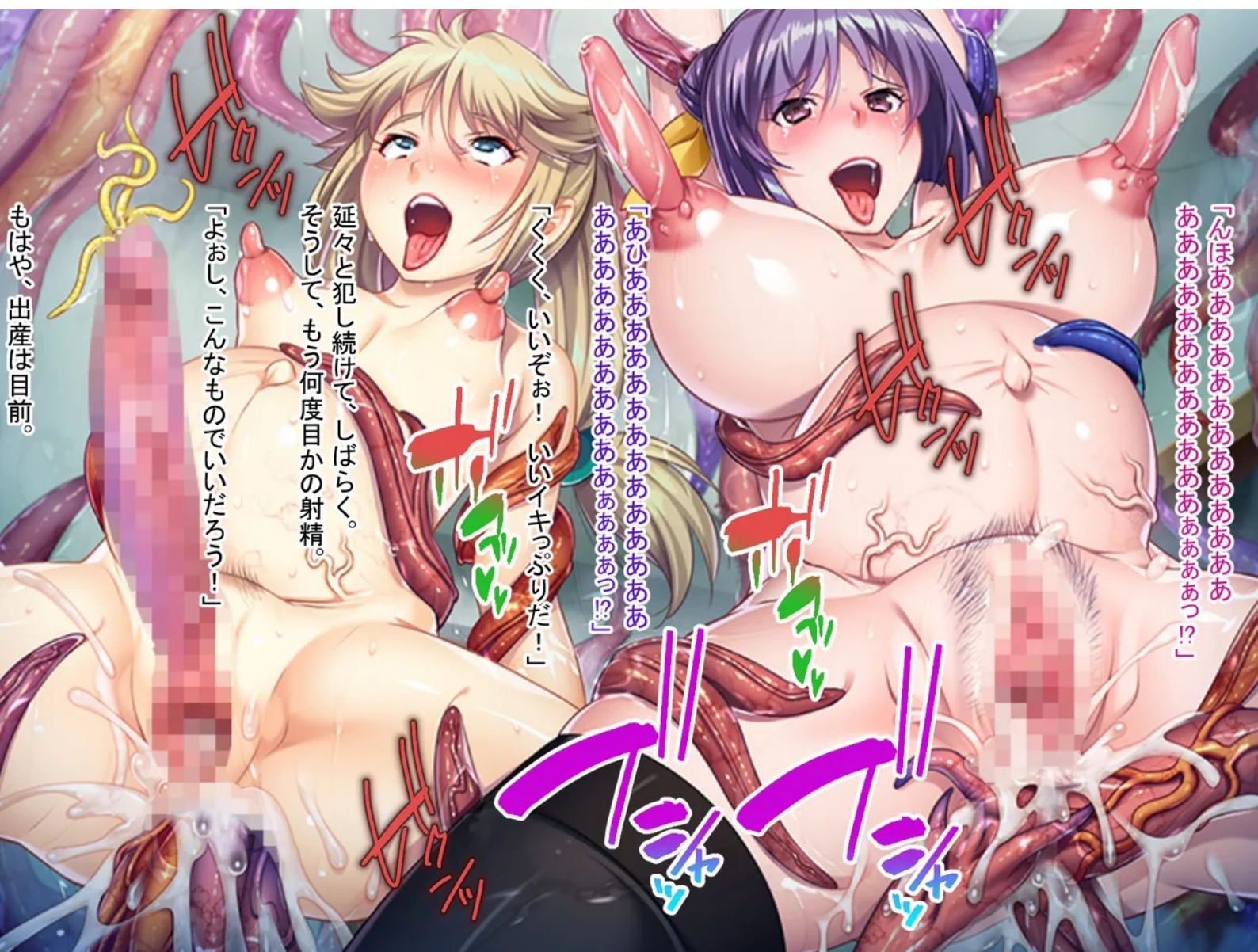
「あひあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ!!」

「くくく、いいぞおー! いいイキっぶりだー!」

延々と犯し続けて、しばらく。
そうして、もう何度目かの射精。

「おおし、こんなものでいいだろうっ!」

もはや、出産は目前。





「んはぁっ、はひいらっ、あはぁんっ……
なにがっ、きこぬんっ……
すっく気持ちいらの、きこちってりゆのおお……」

「くく、その感覚を拒むなよ」

「あひぁあぁあぁんっなにがっ、どりゆ……
気持ちいらの、どりゆ……」

「ひはっ、ひはぁっ、ひはぁあぁあぁっ……
産まれりゆっ、産まれりゆっ……」

くく
はぁ
はぁ

んん
んん

んん
んん

んん
んん

んん
んん

んん
んん

んん
んん

可愛い子どもたちの出産を終えて。

女と小娘は、あまりの快感に揃って気を失った。

だらしなとは思わない。それだけの行為だったのだから。

そしてこれで、

小娘はもちろんな女も苗床として完成したと言えるだろう。

これだけの質であれば、どちらにもニオルヒム様に上納できる。

この一級品の苗床と、ニオルヒム様の御力があれば、

さぞ素晴らしい触手たちが増えることだろう。

それこそ、「いつらのような悪滅師どもなど

余裕で打倒できるような触手だ。

「さて、そうと決まれば……納品の日まで、

苗床の品質が劣化しないよう維持しなければな」

可愛い子どもたちが活躍する未来を、今から期待しながら。

俺は、まだ気絶したままの女と小娘へと触手を伸ばすのだった。

それからしばらく。

女と小娘を苗床として調教し終えた俺が次にやることは、ニオルヒム様への上納の日を待つことだった。

それまでの間、せっかくの苗床を放置する訳にもいかない。

「あひあああ、あつ、あああんっ……！ 乳首を……
もっどっ、もっと気持ちよくしてえっ……！」
「れしゅきっ、らいしゅきごっ……
精液もっどらしてっ、また孕ませてえっ……
ひあんっ、ああんっ……！」

「ふむ、やはり別格だな」

何度達しても物足りず快楽を貪り続けるその様子に、
我ながらいい仕事をしたものだと思える。

「せっかくの逸材、
みすみす手放すのも惜しいな……」

小娘のほうは、もったいないが
ニホルニホル様に上納してもいいだろう。
だが女のほうは近年稀に見る逸材だ。
可能ならば、手元に残して
自分のモノにしたい。

「……」
どうせニホルニホル様は現場のことなど知りはないんだ。バレル訳がない」

子知子知

子知子知



—そして、それからしばらく。

俺は予定通りに小娘だけを上納し、
女に關しては手元に残すことにした。
もちろんニールヒム様には報告しておらず、
こっそりと飼っている状態だ。



「んはああんっ、ひおあああっ、
あはあああっ……………」

「これっ、しゅきん……………
乳首じゅほじゅほ、しゅきん……………
んはああっ、ああああん……………」

「そんなに嬉しいか、
このちゃんこ淫乱女め……………」

「もっもっ、もっ……………
気持ちいいっ……………
んはああんっ、ひああっ、ああん……………」



「乳首、おっぱい、おっぱい……
射精、おっぱい、おっぱい……
おっぱい、おっぱい……」

よほど盛大にイッたのが、
女の絶頂の波はまだ引かない。
乳首射精も止まることなく、
かなりの量を放ち続けている。

「はあーっ……はあーっ……
しゅきい……気持ちいいの、しゅきい……」

「はあ、はあ……くくく、素晴らしい絶頂だったな……」

「以前から、こうして調教した苗床を取り込んだ
“自慰行為”をするのが趣味だったが。
やはりこの女は格別だ。」

お……お……
お……お……

……

……

……

「これはもう、手放す気になれんなあ。
ニルヒム様に気付かれないよう
気をつけねば」

「貴様、やはりそう言うことだったか」

「うん、ニルヒムの声は、ニルヒム様あ」

「このニルヒム様を騙そうなどと
愚かな真似を。
貴様、自分が何をしたか
理解しているのだろうか」

「いや、これはその
事情があります。くくく」

「黙れ。貴様には罰を与える」



『触手地獄に墮ちる。そこで死ぬまで悔み続けるがいい。』

「ん、逃げなければっ…………… お、おい女！ 排出するぞ！」

「はあ、はあ…………… やだあ……………」

もっとお…………… もっとお持ちよく…………… くらとあ……………」

「なる!? 貴様、この状況がわからんのか!?

離せ！ 離さんかあ！」

「もっとお…………… もっとお持ちよく……………」

「あ、後でしてやる！

だから今は、今だけは離せ！」

すでに正気を失っている女には、

俺の言葉など届かず。

女はまだこの状況を理解していないのか、へらへらと笑うだけ。

そんな女を、憎しみを込めて睨みつけながら。

俺には、絶望する「と」しかできないのだった……………」



大人の禁SEXY絵本

©アパタイト